

音を愛でる

# 3 都市の音環境資源の発掘と活用

川面から江戸東京を聴く音楽会



鳥越 けい子  
TORIGOE Keiko

青山学院大学  
総合文化政策学部/教授

多くの環境騒音にあふれるまち。しかし、川面からまちの音を聴いてみるとそこには普段は気づかない魅力的な空間や資源がある。都市を音から再発見する試み「船上の音楽会」。そのフィールドワークを覗いてみよう。

## 都市の音遊び

音を通して都市環境と美的に交流する感性と文化を、東京をはじめとする現代都市で再生するための新たな方法を模索すること。それが今、私にとっての最大の関心事のひとつである。そのため、最近力を入れているプロジェクトに「名橋たちの音を聴く」と銘打った、船上の音楽会がある。

会場は東京・日本橋川の常盤橋から江戸橋にかけての川面。周囲は江戸城の常盤橋門跡の石垣、辰野金吾設計の日本銀行本店をはじめ、三井本館、三越本店、また三菱倉庫、日証館といった建物が集積する地域。江戸城の石垣を使って建てられた歩行者専用の常盤橋と、関東大震災の復興事業で新設された昭和通りが走る江戸橋との間に、日本橋、西河岸橋、一石橋、常盤橋の4つの橋が架かり、川の上空には首都高が幾層かで走るといふ、江戸東京の都市の歴史が色濃く刻まれたエリアである。

この音楽会の初回は2010年春と秋の2日間、「日本橋架橋100周年プレ企画・船上の音遊び」として実施した。「日本橋川には、日本橋をはじめ数々の歴史ある橋が架かっていますが、その橋の下をくぐるとき、独特の音響を感じることができます。舟に乗り、都市の喧騒と音楽に耳を傾けながら、普段とは異なる視点から都市空間を体感するアートプログラムです」というのは、そのチラシの文言。つまり重要なのは、それが「音楽会」でありながら、都市の「音遊び」であり、その最終目的は川面から音の世界を通じての都市体験にあること。即ち、「音の世界を切り口とした都市の環境資源発掘とその活用」ということで

ある。

本稿では実施内容を例に、その背景としての問題意識、企画に至る経緯、プログラムの内容とその決定までの作業、制作上の工夫、本プロジェクトを通じて発掘した都市の音環境資源と活用の実体等について報告する。

## 問題意識

本プロジェクトの会場である日本橋川には、大都市東京の環境騒音が昼夜を問わず流れ込み、首都高からは車の走行音等が絶えず降り注いでいる。現場の低周波帯域の環境騒音の厚みは、自動車交通に依存した、現代都市一般に見られる音環境の特徴である。同時にそれは、「都市の経済原理に基づいた効率性」のみを優先してきた近代以降の都市計画がないがしろにしてきた問題の本質を、極めてシンボリックに伝えている。このような場所で人々は、通常でもあまり意識を払わない音環境と自分たちとの間に、無意識に一種の「皮膜」をつくってしまう。

しかし、この「見捨てられたような音響空間」のなかにも、いくつかの魅力的な資源が隠されているのかもしれない。そのために、何らかの工夫をもって、その場所を訪れる人々が周囲の環境に対して、自らの感性を生き生きと発動していけるような状況をデザインすることが必要であろう。

その試みはまた、長い目でみれば、人類史上類を見ないような都市の音環境の現実のなかで、その実態に無意識となり、日常の風景として受け入れてしまうという、現代人とその音環境との間に存在する本



図1 2010年「名橋たちの音を聴く」進行表 (提供: 鷺野宏デザイン事務所)

質的問題の回避にもつながる。そうした音も含めた現代都市の基本的構造に対して、私たちが自らの実感を通じた議論をする機会をつくることにもなる。

そのための方法としては、さまざまなことが考えられるが、このような川で「船上の音楽会」を開催することもまた、有効な方法に違いない。なぜなら、音楽を聴くために開かれた「美的な耳」は、音楽の向こうに広がる都市の音風景をとらえることになるからである。

そのとき、人々はきっと、それまで決して気づくことのなかったさまざまな音響資源の存在に、気づくことになる。同時に、そのような耳が開かれたとき、即

ち人々が、それまで専ら視覚を通して鑑賞していた景観を「全身感覚」でとらえたとき、日本橋を含めた個性豊かな橋たちは、また川面から眺める豊かな景観は、さらにその魅力を増すに違いない。

## 川面から江戸東京を聴く音楽会

このような問題意識を具体的なプロジェクトとして企画し、その実施に参加できたのは、2008年に「都市楽師プロジェクト」と出会い、さらにその翌年、同プロジェクト総合ディレクターの鷺野宏より「日本橋川での船上の音楽会」企画協力の依頼があったからである。



写真1 日本橋へ向かう「船上の音楽会」



写真2 日本橋下の空間



写真3 首都高下で拍子木を打つ

私たちはまず、今回の船上の音楽会の目的が「音楽を聴くだけでなく、それを通して都市の音を聴くこと」であり、その「都市の音」には、日本橋をはじめとする、それぞれの特徴をもった構造物としての橋の下の音響空間も含むことを確認した。そして、このイベントのタイトルを「日本橋：名橋たちの音を聴く都市を音から再発見する不思議な舟旅」とした。

こうした企画コンセプトを確認した後、私たちは実験船を出し、会場となる常盤橋から江戸橋にかけての川面とその周辺に、その視覚的な景観資源と共にとどのような聴覚的環境資源が存在しているかを、確認・調査した。その方法は、船を予定ルートに沿って走らせながら、それぞれの地点で見える景色を確認すると共に、周囲の空間に耳を澄ませた。すると、環境騒音が気流のようにいくつかの束になって渦巻いている。突然、救急車のサイレンや楽器のような音が聞こえてくる。見た目は同じ天井のように見える高速道路の特定の箇所からは、ドラムのような音が降ってくる等、そこには実に興味深い音環境の実態が存在していることを確認することができた。

さらに、声や楽器でいろいろな音を発しながら、それぞれの橋下や高速道路と周囲のビルに囲まれた川面の空間で、さまざまな地点で聞こえる都市の音、自分たちが発した音の反響や残響を確認した。すると、幅員や素材、高さの異なる橋の下にはそれぞれ異なる音響空間が、また橋下以外の川面の空間にも、周囲の建造物との関係によって、独特な性格をもった音響空間が存在していることが分かった。その他、川面から見える建物その他の構造物の意匠や歴史、周辺地域のまちの物語等が伝える音の歴史的



写真4 熱唱する楽師

歌う曲目や私の解説やワークショップの台本などの船上での活動内容についての検討を進めた。その際、心がけたのは、歌の種類やその歌い方、解説やワークショップの内容等を、それぞれの地点の視覚聴覚双方の環境資源の特性との関連のもとに決定することだった。

### 音楽会のプログラム

図1に示す2010年11月14日に実施した「名橋たちの音を聴く」プログラムに基づき、舟旅往路の実施内容のポイントを簡単にまとめると以下ようになる。

#### ① 常盤橋防災船着場より出発

私の挨拶の後、イントロとして「橋と音」のテーマに因み、橋上や橋詰でまちの音に耳を傾けて占いをする「橋占<sup>はしうら</sup>」の風習について解説。

#### ② 江戸城常盤橋門跡の石垣付近

私が乗船者に辻と最初の歌を紹介。辻が出発の儀式も兼ね石垣をバックに、今回のイベント用に出演者がオリジナルに創作した『集まったのは川の歌』を高らかに歌い上げる。

#### ③ 常盤橋～常盤橋

この舟旅の目的を解説。船は折り返し、江戸城常盤門石垣の石を使って1877(明治10)年につくられた西洋式石橋である常盤橋(ルネッサンス様式)に因み、辻が16世紀イタリアルネッサンスの頃の『お濠の向こうに』を歌う。

#### ④ 常盤橋～一石橋～西河岸橋

都市の音を楽しみ味わうための方法を伝授。「一番遠くから／上から／右から聞こえてくる音」など音がやってくる距離や方向に注意してまちの音を聴く方法を解説し、参加者はワークショップとしてそれを試みる。

#### ⑤ 西河岸橋～日本橋

現在の日本橋が20代目であり、2011年の架橋100周年に備えた修復・清掃工事中であることを

資源についても調べた。

一方、船上の音楽会の「楽師」は1名、独自訳日本語歌詞による1600年頃のイタリア歌曲等の歌唱を得意とする辻康介、ならびに「解説者／ナビゲータ」として私も乗船することになった。船の運行やコストに関する検討も行った。そうした基本的条件のもと、辻の

解説。さらに、日本橋の欄干の意匠「麒麟」の鳴き声を想像してみようと参加者を誘った後、辻が『麒麟の歌』を歌う。日本橋をくぐりながら、「鳥越のイメージした麒麟の鳴き声」(星憲一郎制作協力による電子音響データ)を再生。

#### ⑥ 日本橋～江戸橋

まちの音の体験ワークショップの一環で、江戸時代にもこの地域の夜回りで使用されていたはずの拍子木を使って音を出し、音の反響や残響を体験。同時に、本所七不思議のひとつ『まわり拍子木』の怪談を紹介。江戸橋の直前で、参加者に目を閉じるよう指示。

#### ⑦ 江戸橋

14世紀イタリアの作者不詳の『夜明けの星のAVE MARIA』を歌いながら江戸橋の中へ。歌い終わった後、目を開けるよう指示し、江戸橋について解説。続けてコルシカ島民謡『鐘を鳴らすのは』を歌う。

船はその後、江戸橋ジャンクションの下に出る。三菱倉庫や日証館といった建築と川との関係について、また東京オリンピックを契機に建設された首都高と川や現代都市の関連について解説しながら、船は折り返す。

朝から夕刻まで4回、船上から聞こえる都市の音は、少しずつ違ったが、いずれの回も下船する人々の顔には、それぞれ満足げな表情があった。以下は、ほぼ同じプログラムで実施した2010年春の舟旅実施後、参加者のひとりから寄せられた感想文である。



写真5 常盤橋と江戸城石垣付近



写真6 江戸橋下の空間

高速道路の音を舟の上で下から聞くと、随分違って聞こえます。あの日は天気も良かったので、目を閉じても明るくて辻楽師の唄が空に広がっていくように感じました。ところが突然暗くなり、声が反響し出すとまるで教会の中のようにひんやりして怖いくらい。それが江戸橋の下でした。

### 文化活動の新たな枠組み

2011年は8月と9月の3日にわたり、新たなゲストとして打楽器の岩附智之(8月21日)、能楽師の安田登と笛方の槻宅聡(9月24日)、古楽器の近藤治夫(9月25日)がそれぞれ出演者として加わった。また、日本橋架橋100周年を機に新たに整備された日本橋船着場を利用することとなり、昨年の実績を踏まえ、そのプログラムや進行表に改変の手を加えた。

そのような意味で、本プロジェクトには今後さらなる展開・成長の可能性があるし、それはまだ実験段階であるとも言える。本プロジェクトに関してはまた、今後さまざまな観点からの評価(成果や課題についての考察や分析)が可能かつ必要であるが、その最大の成果は以下のようなことである。

それは即ち、本プロジェクトの実践を通じて、会場となった日本橋川とその周辺には豊かな音環境資源があること、同時にそれら資源の活用のためにはこうした「船上の音楽会」がひとつの有効な方法であること。橋の下をはじめとする川面のさまざまな地点には、それぞれ独自の音響空間が隠されていて、船上で音を出すという行為は、その変化を分かりやすく体験する方法としてもうってつけであることを確認できたことである。

いずれにせよ、大部分を部厚い都市の音に埋もれた日常のなかでも、音の世界を通じて私たちの存在と周囲の環境との間に、生き生きとした関係をつくる

ことができること、いつ何が起きるか分からない都市の環境音と船上の音楽のコラボの魅力、そのシュールで優雅な舟旅を参加者と共に堪能できたことは、私自身にとっても大きな収穫だった。

現代日本の都市に今、文化活動の新たな枠組みを切り拓きつつある「都市楽師プロジェクト」の発展を切に期待する。